かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 152 号

平成25年４月15日

編集　旭　川　医　科　大　学
発行　教 務 部 学 生 支 援 課

「富良野岳より」　（写真撮影：写真部 医学科 ４年　石田久美子）

平成24年度学位記授与式 学長挨拶 …吉田　晃敏……２
平成24年度旭川医科大学 医学部 医学科 第35期生へ
……鎌田　恭介……５
看護学科第14期生に贈る言葉……作宮　洋子……７
「在学中の皆様へ」……髙取　恭平……８
卒業にあたって……豊嶋　更紗……９
卒業にあたって……横山　一弘……10
卒業にあたって……浦島　　俊……11
「卒　　業」……高橋　里奈……12
『卒業をむかえて』……合田奈保美……13
一年間を振り返って……宿田耕之助……14
一年を振り返って……千葉　　遥……15
一年間を振り返って……山田　一紀……16
「入学してからの１年間」……楯　　尚子……17
一年間を振り返って……藤井千妃呂……18
放射線（核医学）診療を志したきっかけと想い
……油野　民雄……19
臨 床 検 査……伊藤　喜久……20
海外ボランティア診療に参加して…飛騨由紀乃……21
第65回ベトナム社会主義共和国ベンチェ省における
医療活動に参加して……鳥越　千翔……22
海外留学制度を利用して……立岡　美穂……23
外国人留学生交流事業……24
学生表彰式……25
白衣式について……26
平成24年度　学位記授与式……27
学生の個人情報の取り扱いについて……28
各種保険について……29
平成25年度日本学生支援機構奨学生の募集について …29
平成25年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について …29
授業料未納による除籍について……30
学生団体の「継続届」「設立届」の提出について ……30
インフォメーション……30

平成24年度学位記授与式　学長告辞

志ある若者達の新たな挑戦・旅立ちに対して、心からの賛辞を

学　長　吉　田　晃　敏

（今回はご要望により、2013年３月25日に行われた学位記授与式 学長告辞を原文のまま掲載いたします）

本日、３つの学位記授与式（卒業式）を挙行し、卒業生、ご父母の皆さんと、感動を共有出来ました事を大変嬉しく思います。

始めに、医学科第三十五期生94名の皆さん、並びに看護学科第十四期生69名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんを今日まで育てて来られた、ご父母の皆様の感慨もひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。学年担任をはじめ、教職に当たられた先生方、そして、学生諸君と接してきた職員の方々も、本当にお疲れ様でした。

また､医学博士の学位を取得された14名の皆さん、そして、看護学修士の学位を取得された６名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。皆さんの優れた研究業績と､指導教員と苦労を共にした努力に対し、深く敬意を表します。努力で勝ち得た学位です。これを誇りとして、大きなステップとして、今後につなげて下さい。より高いレベルの医療人へと、更に成長される事を期待しています。

さて、振り返ってみれば、医学科第35期生の皆さんが本学の門をくぐったのは、今から６年前の2007年でした。その後続いた、正に激動の時代を、少し振り返ってみたいと思います。

当時の日本を率いていたのは、小泉首相から政権を引き継いだ安倍晋三首相だった事を、覚えているでしょうか。しかしその後、首相が次々と交代。政治と経済は、長いトンネルに入りました。

翌2008年には、100年に一度とも言われた金融危機、いわゆるリーマンショックが発生。世界経済は大混乱に陥ります。

看護学科第14期生の皆さんが入学した2009年には、民主党新政権が誕生しましたが、高い支持率は長くは続きませんでした。

翌2010年、チリで大規模な落盤事故があったこの年、日本はついにGDPで中国に抜かれ、円高も急ピッチで進行。

そして迎えた2011年３月、東日本大震災が発生しました。かつて経験したことのない大きな被害、そして原発事故という大惨事に、私達は向き合う事になりました。

翌2012年、ヨーロッパを中心に、再び、経済危機が再燃。日本では、尖閣諸島を巡る問題で、中国との関係が悪化し、北海道からも中国人観光客の姿が消えていきました。そんな中、日本の山中伸弥教授がノーベル医学生理学賞を受賞。

年末には総選挙となり、日本の舵取りは、再び安倍晋三首相が担うことになりました。

そして迎えた2013年です。気が付けば、世界経済は再び上昇をはじめ、日本の先行きにも、少し明るい兆しが見え始めてきました。

振り返ってみると、皆さんの学生時代は、日本が、世界が、大きく揺れ動いた、まさに激動の時代でした。

特に、東日本大震災以降、皆さんの多くは、医学を学ぶ者として､自分に出来ることは一体何なのか、気持ちが大きく揺れ動いた事と思います。そのような中で、皆さんは、自分に課せられた使命を自覚し、真剣に勉学に向き合ってきたからこそ、こうして今日、無事、卒業の場を迎える事が出来たわけです。是非、胸を張ってほしいと思います。

一つの命は地球よりも重いと言われながらも、現実には、助かるはずの命が失われている場所がある！

被災地だけの話ではありません｡北海道の話です。地域格差は拡大し、医師は今も、全道で不足しています。

医療はどうあるべきか。国民の命を守るために、何をすべきなのか･･･

今から40年前、この重い問いかけに対する、一つの答として誕生したのが、皆さんが学舎として選んだ、ここ旭川医科大学でした。
震災という重い時代体験を前に、皆さんが問い続けたように、私もまた、当時、旭川医科大学の一期生として、医療の在り方、命との向き合い方を考えながら、この大学の門をくぐりました。

以来40年。医師不足は解消したでしょうか？　答えはノーです。医療格差は解消したでしょうか？答えはノーです。それどころか、問題はますます深刻となっています。今や、道内でも至る所で、医師が足りません。

一方、看護師不足もまた深刻です。国が看護体制を見直したことでニーズが一気に高まり、慢性的とも言える看護師不足状態が、全国で続いています。

このような、正に危機的な「医療者不足」を前に、国は、平成20年度から医師増員へと大きく舵を切りました。現在、医師は毎年4,000人程度増加しています。今後、平成26年以降は、この入学定員増員分が卒業しますので、医師数は更に増え20年後の日本は、今とは逆に世界でも１，２を争う医師大国となってしまうとも言われています。

医師不足と医師過剰。このような矛盾する情報を耳にする度に、皆さんはきっと、自分は一体どうすればいいのかと、将来に対して漠とした不安を抱いているかも知れません。
しかし、皆さん、今この瞬間の現実を、見つめて下さい。
医師が不足しているか、過剰なのかは、問題ではありません。問われるのは、「志」です。私は、いくら医師が増えても、志ある医師が増えない限り、医療格差は解消しないと思っています。

私達の旭川医科大学は、正に、その「志」、地域医療に貢献せんとする「志」ある医師や看護師を育てる事を目的に生まれた大学です。そのために出来る事は何かを、常に考えながら、私自身、旭川医科大学の「改革」を進めて来ました。

さて、ここで、皆さんの在学中に実現した事を、もう一度思い出してみましょう。

一つは、「地域医療教育学講座」の新設です。北海道で最も必要な医師はどのような医師か？幅広い総合的な臨床能力を有し、自分の得意分野を併せ持つ真の専門医、このような良医を、継続的に育成することを目的に設置しました。

そして、「ドクターヘリ」です。ヘリポートを本学敷地内に造りました。

また、新たに立ち上げた「救命救急センター」が、救命救急医・看護師養成へと繋がっています。

それから、「デイ・サージャリー室」を２室、病棟内に造りました。今年度の手術件数は7,000件の大台になる見込みで、本学のような600床規模の国立大学病院の中では、飛び抜けた手術件数です。

さらには、一昨年の10月に、本学で初めて、「生体肝移植手術」を行いました。「先進医療」を地域へ提供したい本学にとっては、大きな一歩です。

看護師に対しては、本院外で行われる研修費用の全額を、大学が負担しています。これは、他の国立大学病院では例がありません。
また、女性スタッフが安心して出産、育児、介護にも取り組めるようにと、「復職・子育て・介護支援センター」も設置しました。

これらの施策の積み重ねにより、道内では初めて、東日本の国立大学病院としても初めて、「働きやすい病院評価」、ホスピレートという名誉ある認定を得ております。本院は、高く評価されました。

加えて、本学では、医師の待遇改善にも取り組みました。病院で診療に従事する医師、すなわち、初期臨床研修医から教授に至るまで、全職種を網羅して、給与のアップ、特別手当を支給しています。これは、全国の国立大学でも初めてです。中でも、初期臨床研修医に対する支給額は、奨学金も含めますと月額50万円となり、これは国立大学病院で最高額となります。

また、初期臨床研修医は、１年目から本学の大学院博士課程に進学できる制度を作りました。

そして、建物も整備しました。皆さんが入学した年には、学生サロンを造り、ここ体育館の床を張り替えました。覚えていらっしゃいますか。その後、総合研究棟は新しくなり、講義実習棟は、今、正に改築中です。

これら、数々の改革を通じて、私が目指してきたものは「人材育成」でした。

果たして、目的は達成されたのでしょうか。その答えは、今日、ここにお集まりの皆さん、お一人おひとりです。皆さんがこうして、大きな節目を迎えることが出来た事が、先ず私は、ただただ嬉しく、胸に迫るものがあります。

自分自身の努力をたたえ、どうか胸を張って、新たな一歩を踏み出してください。

私自身の志は、遠隔医療という形で、一つの実を結びました。まだインターネットさえ普及していなかった時代から、私を一貫して支え続けたものは、住んでいる場所に拘わらず、どこでも、必要な時に必要な医療を受けられる環境を創りたいという思いです。皆さんが入学した、2007年には、アジア（タイ、シンガポール）との遠隔医療を始めました。そして、昨年には、中国との遠隔医療も始まっています。総務大臣賞、文部科学大臣賞も頂きました。しかしながら、私自身の志は、まだ、道半ばだと思っています。

皆さんの「志」は、何でしょうか？

医療人としての新たなステージを前に、今、もう一度、自分自身の胸に「自らの志」を問いかけてください。

旭川医科大学に残って下さる皆さんとは、これから新しいステージで、地域医療のため、世界の医療のため、そして、高いレベルの研究を行うため、共に頑張って行きましょう。
大学を去る皆さんとは、将来、更なる発展を成し遂げたこの母校で、共に働ける日が来る事を心から願っています。

これからの道のりは、学生時代より遙かに長くなります。自分ではまっすぐ歩いているつもりでも、たとえば、砂浜に残った足跡を振り返ってみると、その道は、時に、大きく曲がっています。自分にとって、何が良かったか、何が悪かったか・・・。その時は、分からないかもしれません。

出来る事は、ただ一つ。
昨日の事でも、明日の事でもなく、ただひたすらに、「今」を精一杯生きる事です。その時の判断・選択が、自分自身の転機だったと気づくのは、時には何年、何十年も後かも知れません。それが人生だと思います。

志ある若者達の新たな挑戦・旅立ちに対して、心からの賛辞を込めて、ここに学長の告辞といたします。

道に迷った時は、いつでも大学の門を叩いて下さい。
旭川医科大学は、いつまでも、皆さんのための、母校です。

卒業、おめでとう。

平成25年３月25日
旭川医科大学　学長　吉田晃敏

平成24年度旭川医科大学 医学部　医学科　第35期卒業生へ

平成24年度医学科第６学年担当
脳神経外科学講座　教授　鎌　田　恭　輔

人生にはいくつもの岐路があります。人は年齢を重ねるごとに、生き方の選択の幅が狭くなっていきますが、反面、その中身は格段に濃厚なものと変わっていきます。高校時代にどの大学の、どの学部を選ぶかという選択は、皆さんがそれまでに遭遇したことのないような大きな人生の分かれ道ではなかったでしょうか。その動機は何であれ、皆さんは志を持って“医学”という道を選ばれ、本学に入学してきました。そして今卒業という大きな節目を迎え、その胸のうちは、これから取り組むことになる生命の成り立ちの不思議さへの尽きない科学的興味、病む人に対する思いやり、疾病に対峙することに全能を使いきる使命感などの熱き思いに満たされていることでしょう。卒業を機会に、さらにそれぞれの専門分野を選び、その生き方を鮮明にされた皆さんにとって、医学という共通のテーマは生涯にわたって一人ひとりを魅了するに十分な内容と深みのある学問であると私は断言できます。しかし、医師となるこれからは、いままでとは一味違った生き方を仲間も社会からも皆さんに求められていることを、しっかりと自覚しておかねばなりません。

学生時代とこれから医師人生

私の学生時代は楽しい仲間と時間を共有し、気ままに授業にでながらクラブ活動を謳歌していました。また、学生時代の試験は難易の差はあっても、正しい答えが用意されていました。授業、試験、実習、そして国家試験という４つの関門さえ通れば医師になることができます。つまり、与えられたことを行い、学び、単純に覚えていけば医師国家試験には合格することができるのです。しかし、これから皆さんが身を置く医学の現場では、誰も正解を見出せない問題に対して、医師という重い職責のもと、可及的にその時のベストと思われる判断をくだし、時には苦渋の決断をする機会も少なくないはずです。私が卒業して直面した自分自身の問題は、患者の立場になり、心から治療に集中することができなかったことでした。教科書の知識から病気の内容、手術治療の流れは理解できたものの、その先は患者の生命力にかかっているため自分の出る幕はないと考えていました。経験の少ない医師が患者を診ずに、浅い知識だけで診療を片づけていくというスタイルでした。しかしその後手術をさせていただける時には、たとえ研修医であっても結果がすべてであり、また患者に対する診療姿勢も、患者、医師、パラメディカルスタッフからも評価されます。この時に良くなるべき患者を、“治るはずだ、いや必ず治す”いう強い医師根性というものを心にもって臨まねば、決して一人前の医師にはなれません。一般的に患者は適当な治療をしていても80％程度は治っていきます。手術治療はその技術のみならず、術前の患者との信頼、術後管理、ケアを個々の患者の立場にたって行わなければなりません。またその中で、決して無知を隠す嘘、誇大な表現、駆け引きなどは言語道断であり、真摯、かつ誠意をもって患者に接することが大切です。医師になったからには、病気、解剖がわからない、手術手技の練習を怠っているようでは、プロフェッショナルとして明らかに失格です。私は卒業してからは悩みを抱えながらも、まず常に堕落しないように、教科書、論文を読破し、手術の練習を重ねながら自分自身を鼓舞して努力してきました。そして臨床に真摯に取り組んでいくなかで、患者の痛みを知り、“ともに病気と闘っていく仲間”として患者と接することができるようになってきました。患者は病院でなく、我々医師個人を信頼し、救いを求めてやってきます。大学病院などの大きな施設に働いている医師が偉いということはありません。どこにいても患者の心を知り、その痛みを知ることが、皆さんを一人前の医師に育ててくれます。最近は大都市に研修医が流出する傾向があります。私が東京にいたときも各地から集まってきた研修医を指導しましたが、中には患者への説明、診

療が後回しとなり、仲間同士の競争と自分の生活の安泰を図っている者もいました。このような姿勢で臨床を続けていた多くの研修医はすぐに研修の場を失いっていきました。どこで働いている医師でも患者に対して、プロのプライドをもって接していかなければなりません。決して背伸びをする必要はありません。自分のわからないことは、わからないと判断して上司、または他の施設のスペシャリストに相談することも大切です。学生時代と医師になってからの生活は、医師生活が妥協のない、社会的にも大変重責の大きいつらい生活です。しかし、それでも医師を続けていけたのは、患者とともに病気に立ち向かい、そして私には脳神経外科学という大きな武器をもちながら患者に寄り添っていけたからでした。辛いことが多い医師人生ですが、患者、弱者を救うことができる職業を誇りに思うと同時に、ぬるま湯につかっていた学生生活は懐かしいとは思いますが、決して戻りたいとは思いません。医師は基本的には奉仕の心を常に持ちながら働かなければなりません。人の生命を差別することなく、尊厳をまもるために全力を尽くす職業です。皆さんの選んだ医師という職業は本当にやりがいのある仕事にあふれていると思います。

医師としての思いやりと品格

医学を取り巻く環境は最近大きく変わってきています。進歩し続ける医学、たとえばクローン技術の人への応用の可否、延命がクオリティ･オブ･ライフか、脳死に関わるユニヴァーサルな死生観はあるのか、などの数々の差し迫った問題はいずれも一義的には解答が出せない難問です。

このような視点に立てば、いまの複雑化した医療の現場では、単に医学的な知識の絶対量だけでは対応できないことは、皆さんにも容易にご理解頂けると思います。つまり、これからは、医の原点に立ち返り、病む人の側に立って考えることのできる思いやりの精神を学ぶことも必要ですし、一方では物事を決定し、判断を下すときに自分なりの揺るぎない根拠を自他共に持つことができるような大局観を養うための修練を積むことも望まれます。

上述しましたが私のいささかの人生経験と自省とを交えて述べるならば、皆さんにとってこれから大切なことは、単に医学の知識を詰め込むことに心を砕くのではなく、幅広い意味での教養を身につけておくことが強く求められていることをしっかり認識しておいてもらいたい、ということです。医学の勉学はもちろんですが、医学以外の分野にも興味を持つことが必要です。私は工学部で２年間、ドイツで２年間、米国で１年学びましたが、他分野職種とプロとして、また人間としての交わりも、知識・人生を豊かにしてくれました。言葉も背景も異なる患者や医療従事者と平等に接するには、様々な背景を知ったうえで正直に関わることで、揺るぎない信頼関係を築くことができます。私は皆さんに卒業してから早いうちから多くの異なる科学・文化・言語に接していくことを勧めます。幅広い知識、慈しみの心、真摯な姿勢をもつ“医師としての品格”を身につけることが、皆さんのみならず、その後輩たちが見習う道を照らすことにつながると信じています。そしていつの日か立派に成長した皆さんがこの旭川医科大学に大学人として勤務してくれる日を楽しみにしています。

どこにいても自然体で頑張り続けてほしい。

いま、卒業生の皆さんは、自らに相応しい専門領域を選択し、今日限りで旭川医科大学医学部をあとにされる方もおられます。また、本学にとどまり優れた研究者や信頼される医療人を目指そうという方もいます。そのいずれの場合も、いま、この瞬間から、あなた方の新たな闘いが始まるのだ、ということを自覚していただきたい。今年、あなた方と同じ医学の学士の資格を獲得したおびただしい数の若い男女が、日本はいうまでもなく、この地球上のいたるところに存在していることをもう一度思い起こしてもらいたいと思います。そして、しかるべき機会に、しかるべき条件の下、お互いが複雑な競合関係に入ることもありうるのだということに、どうか思いを巡らせてほしいと考えています。そうすることで、一方では、皆さんとの競合で本学に入学することのなかった同世代の若者についても想像力を働かせ、これからの医師として生きていくことの責務を再確認して欲しいのです。旭川医科大学医学部を卒業した皆さんには一生その肩書きがついてきます。どこに行っても自然体で自分自身と自分の母校を誇れるような品格を持った医師目指してほしいと願っています。

卒業生の皆さんの一人ひとりのこれからの生活が、未知との出会いで心ときめく感動に溢れたものであり、また楽しくも実り多いものであることを祈念しております。

看護学科第14期生に贈る言葉

平成24年度看護学科第４学年担当
看護学講座　教授　作　宮　洋　子

看護学科第14期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中の皆さんの勉学と学業への取り組み、研鑽の努力を讃えて心からお祝いを申し上げます。

旭川医科大学で修得した知識・技術を携えて、希望に満ちて旅立たれる皆さんをお送りすることは、私ども大学人にとって、最上の喜びであります。皆さんの大学卒業という達成感と、これから始まる新しい生活への期待感の満ちた溌剌とした気持ちが強く伝わってまいります。看護学を修得され、大きく開かれた将来への出発点に立っている皆さんに拍手をお送りします。

思えば旭川医科大学で過ごしたこの期間は、日本にとっても、世界にとっても、大きく様々な価値観が変化し移り変わる時期であったと思われます。変化の視点として三つを例として挙げます。まず、一つ目は、一昨年の東日本大震災です。災害避難者は32万人にも及び、北海道内にも約３千人の方が避難しておられます。被災地復興の取り組みや支援は報道されていますが、まだ長い時間を要するとされており、災害で傷ついた心のケアや健康障害の予防のための施策の推進が課題となっています。

二つ目は経済不況や失業などの社会的要因を背景とする様々なこころの病気の増加が挙げられます。これらの二点は、日本の社会の切実な取り組みやケアすることの重要性と必要性を示すものであります。人間の生命や健康、幸福の願いを実現させることに向けての支援が目前の課題です。この時代を生きる私たちにとって、看護職の役割が大きいことを理解し、真剣に考え、自分にとって何ができるかを考える時、直ぐにできることがなかなか見いだせなくて、悩んでしまうことも多いと思われます。しかし、看護の対象としての人に看護職としてできる小さなことからでも実践していこうとする志をもっていただきたいと思います。

三つ目は、iPS細胞（人工多能性幹細胞）開発による再生医療の研究のニュースです。

医学研究の進歩発展は確かな手ごたえで近い将来、新しい疾病治療の方法が開発されることを予期させるもので、健康への願いを実現させることにつながることを示すものと思われます。医学、医療のめざましい発展進歩に伴って、看護も新たな看護サービスの展開のシステムや看護技術、方法を開発して行くこともまた必要とされます。

これらの変化を必要とする課題は、若く大きな力をもっている皆さんの活躍に期待するところは誠に大きなものがあります。本学での講義や演習、実習、卒業研究などを通して獲得した看護実践能力を基盤として、医療や公衆衛生の現場でその力を発揮し、努力を積み重ねていただきたいと思います。

これからは、社会人として、一市民として自立し、社会貢献を求められる立場になります。皆さんにとって、自立した職業人としての人生はこれから始まります。その出発点にあたって、一人一人の立場で考えていただきたいと思います。これまでの学生生活は、かけがえのない生活であり、今日のこの幸福は、ご父兄はもちろん多くの人々の支えによって実現したものであると言えるのではないでしょうか。この自己の喜びや幸福を実感していただくと同時に、これから自分はどうしたら社会の役にたてるか、看護する中で人々の幸福を支えることができるか。そのための知識や技術は皆さんの手中にあります。また、その可能性を現実にする力は皆さんの中にあります。心に情熱と燃えるものを持ち続け、多くの方と出会い、成長し続け、新しい時代を切り開く原動力となっていただけるものと信じています。

時代のニーズに応えながら旭川医科大学の建学の精神である地域医療と向き合って歩を進められる事を祈念して贈る言葉とさせていただきます。

「在学中の皆様へ」

医学科第35期　卒業生　高　取　恭　平

［経歴］高３センター試験得点率：80.1％，大学在学中:再試多数，６年模試（偏差値）６月：45.3，８月：41.9，11月：39.6，１月：34.8，国家試験（※予備校採点サービスによる）：偏差値46.2，得点率：80.0％（必修88％），６年間水泳部・合唱部に所属

かぐらおかを手に取り、なおかつこのページに目を留めてくださり、ありがとうございます。医学科35期の高取恭平と申します。このような原稿は成績優秀な方が書くものと思っていたため、依頼が飛び込み仰天しております（ちなみに仰天というてんぷら屋が旭神にあります。安い・美味しい・おかわり自由と大変おすすめです）。私から後輩の皆さんが何か学べるとすれば、「バカでもなんとかなる」ということでしょうか。頭の作りが一般的な人にとって、国家試験への道は辛く険しいものです。幾度も心が折れる、うんざり、やる気が起きない、そんな自分の自堕落さに嫌気がさしてしまうこともあるでしょう。自分はもう駄目なんだとどこかで諦めがつくかもしれません。しかしここでハッキリ明記します「諦めるだけムダ」です。途中で大会に出ようが、海外に行こうが、飲み会に行こうが、きつい実習をしようが、国家試験に必要な知識の分量は増えも減りもしません。果てしない量でありますが、year-note一冊にまとめることもできます。病は気からといいますが、実際に時間・能力が足りなくて国家試験に落ちる人は、本当にごくわずかで、旭医にはいないのではないかと思います。来る日も来る日も勉強（してない）でモチベーションが上がらない、本当は気がかり・やりたい事をこらえていて集中できない、どうせもうダメとどこかで思っている等。ムダです。諦めるだけムダです。向き合って考えなければ、逃げ続ければ当然落ちるでしょうが、国家試験は、上記経歴程度の人間が受かる可能性のあるものです。大変とはいえ不可能ではあり得ません。皆さんはどうしたって後で死ぬほど勉強し、どうあっても受かってしまうのですから、どうぞ今できることを全力でやって下さい(ただただ遊ぶ！だけでは心が貧しくなるのでおすすめしませんが)。今、目の前の部活やバイトは、趣味は、厄介事は、講義は、実習は、本当に医師になる上で無意味なものでしょうか。

卒業にあたって

医学科第35期　卒業生　豊　嶋　更　紗

旭川医科大学に入学してからはや６年。

月日はあっという間に過ぎ去り、卒業の日がいよいよ間近に迫ってきました。

６年間、学業や部活動など学生生活に専念することができたのは、支えてくれた家族やいつも一緒にいてくれた友人たちのおかげです。

心から感謝しています、本当にありがとうございます。

学業面では３学年後期から始めた勉強会の仲間に、幾度となく助けられました。

辛かった試験期間や国家試験、どれも６人の仲間がいなければ乗り切ることはできませんでした。

４学年後期からの病院実習では実際に患者さんとお話ししたり、診察させていただいたことで、勉強へのモチベーションが一層高まりました。

臨床の現場で働く先生たちやコメディカルの方々の姿を見ることで、自分の未来図を描くことも出来ました。

部活動のSnow Injectionでは慣れない部長職にも関わらず、たくさんの後輩たちが入部し、活動の輪が広がっていることがとても嬉しいです。

応援し、支えてくださった先輩たちやOB・OGの先生たちにも本当にお世話になりました。

社会勉強として始めた家庭教師のアルバイトでも、たくさんの出会いがありました。また、いかに相手にわかりやすく伝えるかを考え、実践する経験にもなりました。

生活面では朝まで語り合った飲み会や満天の星空のもとのドライブ、サプライズ誕生日会など、大学生ならではの素敵な思い出がたくさん出来ました。卒業旅行では仲良し３人組でスペインを旅することもでき、本当に良い思い出になりました。

みんな離れ離れになってしまいますが、今までもこれからも大切な35期の仲間です。

AO入試の面接で「患者さんの立場に立って考えることのできる医師」が理想の医師像と答えた日から６年半が経ちました。

しかし、今でもこの目標は変わっていません。

４月から旭川医科大学病院での研修が始まります。

少しでも早く、この目標に近づくことができるよう、日々努力を重ねたいと思います。

ありがとうございます。

卒業にあたって

医学科第35期　卒業生　横　山　一　弘

辛かった国家試験が終わり、今はようやく一息ついています。高校生の時に医師の道を志し、２年の浪人を経て旭川医大に入学しましたが、充実した６年間を送ることができました。何より私にとって一番印象深く、そして苦い思い出でもあったのが、臨床実習でした。

臨床実習が始まってわずか３日目で感染性腸炎に罹患し、旭川医大病院に緊急入院。腹膜炎から、軽い腸穿孔を起こしており、先生からは最悪の場合は手術して、人工肛門という説明が…。ようやく臨床実習が始まったばかりなのに、あまりの情けなさに自分は医師に向いていないのだろうかと当時は軽くショックを受けていたように記憶しています。そんな時にも先生方、同級生、部活や趣味の先輩、後輩に支えられて乗り越えることができました。そのような経験が、来年度からの旭川医大病院での研修を決めたきっかけにもなっています。お世話になったみなさんには大変感謝しています。体調が良くなってからは､実習に対する姿勢も変わっていきました。自分が患者側を経験することで、患者さんがどのように自分の病気に対して考えているのか、医者をどのように見ているのかなど意識するようにもなりました。入院は苦い経験ではありましたが、入院して得たものは大事にしていきたいと思っています。

また、単科大学ということもあって視野が狭くなってしまうこともあるかと思います。私の場合は、幸い将棋という趣味がありました。道内の大会に参加したり、大会運営のアルバイトやボランティア活動として将棋教室で子供達に教えたりする機会もあり、大学外の方々との出会いがとても多く、楽しい大学生活を送ることができました。勉強はもちろん大切なことなのですが、そればかりだと精神的に辛くなってしまうこともあります。後輩のみなさんにも何か真剣に打ちこめるものを見つけて大学生活を楽しんでいただきたいと思っています。

最後になりましたが、お世話になった先生方、職員の方々、先輩、後輩、同期のみなさんには大変感謝しています。本当にありがとうございました。これからは旭川医大で得たものを糧に努力していきます！

卒業にあたって

看護学科第14期　卒業生　浦　島　　俊

４年前の４月、大学生活という新しい環境に多くの不安を抱えながらも、期待に胸をふくらませて旭川医大に入学したあの春から４年間という時間を過ごし、いま卒業の季節を迎え時間の流れの早さを強く感じています。

私にとってこの４年間という時間はとても短く、同時に１日１日が充実した毎日であったように思います。学習に費やした時間、サークルや部活動にのめりこんだ時間、他にも旅行や宴会や遊びなど、今までに経験できなかった貴重な時間を過ごすことができました。そしてその出来事においては、クラスや部活の仲間や先輩・後輩たちと、語り合ったり励まし合ったりふざけ合ったりバカやったり、楽しかったこと辛かったこと悲しかったこと嬉しかったこと、たくさんの思い出が詰まっているように思います。一つ一つが今の私を形作ってくれている、大切なものだと感じます。

ただ漠然と看護師という職業に憧れを抱いていた４年前には、私自身が４年生になり卒業・就職の春を迎えるなんて全く想像できませんでしたが、いざこの卒業生という立場になってこの４年間を振り返ると、自分なりにあの頃よりは人として成長できたように感じる部分もあって、お世話になった旭川医科大学の諸先生方、実習先でご指導頂いた先輩看護師の方々、支えあったクラスの仲間に感謝しています。学習について例を上げれば、授業・演習・実習において知識や技術学んでいく中で、何度も何度も壁にぶつかりました。しかし、その壁を乗り越えていくことで、少しずつ医療者としての自覚と精神的な強さを身につけていくことができたように思います。しかし、看護師という職業について学習するためには、４年間ではどんなに勉強しても勉強しても時間が圧倒的に不足していて、看護を学ぶという行為には終わりが無いように感じました。そしてだからこそ看護師においては生涯学習が大切だと言われているんだと、身をもって感じることができたように思います。この４年間の大学生活で学習し習得できた知識・技術を基礎に、就職後も日々の学習を積み重ね１日でも早く一人前の看護師となることができるように１日１日を大切にしていきたいと考えています。

最後になりましたが、今まで私を支えてくださった方々への感謝と、この春から医療を支えるチームの一員となる自覚とを忘れずに、看護師としての自分を磨き続けていきたいと思います。旭川医科大学で過ごした４年間はとても楽しかったです。いままでありがとうございました。

「卒　　業」

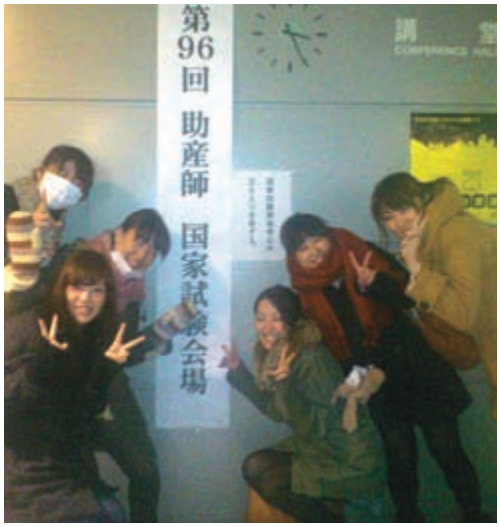
看護学科第14期　卒業生　高　橋　里　奈

国家試験を終え、卒業間近の今、大学生活の４年間はとても充実した毎日でした。振り返ると寂しい気持ちと同時に、春から助産師として働く事が出来る事に喜びを感じています。

私が中学二年生のある日、女性の身体の偉大さと生命誕生の奇跡に心を奪われ、それらに携わる助産師という職業を知って以来、自分の夢として掲げ、４年間で助産師の資格が得られる本学への受験を決意しました。４年前の春、故郷を離れ一人旭川での生活に不安と期待が入り混じる中始まった大学生活。「助産師になりたい」その一心でここまで駆け抜けてきた無知な私にとって、専門分野を学ぶということは自分の価値観や考え方に大きな影響を与えました。実習に行く度に、その分野の魅力を随所に感じ、自分の目標や将来について考える時間が多くなったように思います。また、学費や生活費確保のためにしていたアルバイトを通して、社会人としての考え方やマナー、医療職以外の職業について学ぶことが出来たのも貴重な経験でした。家庭の都合から、部活動よりも学業とアルバイトを優先していたため、他学生と違い、先輩後輩との関わりは少なかったですが、アルバイト時に共通した枠に捉われず様々な職業の方や学生と交流することで、より自分の意志に耳を傾ける事が出来たのではないかと考えています。結果として、自分の意志は変わらず、幸運にも助産専攻に残り、最後まで自分の目標に向き合うことが出来ました。

この４年間学ぶだけではなく、気付かされることもたくさんありました。楽しい時も辛い時も私のそばには家族や大切な仲間がいて、私の心の支えとなってくれました。４年間一緒に頑張ってきた仲間は私にとってかけがえのない財産です。また、常に学生に向き合い、熱心に指導して下さる先生方にも出逢うことが出来ました。これからは別々の道を歩むことになりますが、本学での学びや感謝の意を忘れず、専門職として努力を惜しまず邁進していきたいです。

最後に、私の選んだ道を信じ味方でいてくれた家族、かけがえのない仲間、指導して下さった先生方や指導者の方、私に関わって下さったすべての方にこの場を借りて感謝したいです。本当にありがとうございました。



『卒業をむかえて』

看護学科第14期　卒業生　合　田　奈保美

大学編入後の２年を振り返ると、たくさんの人との出会いと思い出が甦ります。講義や実習、看護研究などでは、大変な面もありましたが、良い経験になったと感じています。

大学での勉学は、私の想像を超える困難さがありました。これまでは、与えられた事を学ぶという姿勢でした。しかし、大学では自ら学ぶという姿勢が求められ、入学当初はとまどいを感じた事を覚えています。そんな時、学部学生や先生方は暖かく編入生を迎えてくれ、次第に学校生活に慣れる事ができました。

実習では、自らが学びたいのは何なのかを考え、ほぼ白紙の状態から実習計画を立てました。一から自分達で学びたい事を考え実習を組み立てる事は、簡単ではありませんでしたが、自ら考え学ぶ事の大切さを学びました。また、南富良野町での実習では、コテージを借りて実習メンバーと生活を共にしました。合宿さながらの実習生活は、実習メンバーとの良い思い出です。

卒業研究では、どうすれば自分達の明らかにしたい結果がでるのか、グループメンバーと深夜まで話し合いを重ねた事。国家試験の勉強では、皆で集まり励まし合いながら勉強した事。この２年間を振り返ると、どの場面も机に向いながら仲間と共に過ごした良い思い出です。

サークル活動では、北海道各地でのキャンプ・カヌーやスキーを通して、これまでに知らなかった北海道に出会う事ができました。
キャンプでは、薪を囲みながら夜が更けるまで様々な話をしたり、各自が手料理を披露したり、一生忘れる事のない思い出となりました。

学校生活を送る中で、時には現実から逃げ出したくなる事もありました。今こうして、晴れて卒業を迎える事ができたのは、多くの人の支えがあったからだと感じています。

最後になりましたが、お世話になった先生方・学生支援課の皆様・家族・編入生やサークル仲間など、これまで支えてくれた多くの人に心から感謝しています。ありがとうございました。大学生活２年間で培った、自ら学ぶ姿勢、経験を大学院生活に活かし、今後も勉学に勤しみたいと思います。

１年間を振り返って

医学科　第１学年　宿　田　耕之介

楽しくて充実した時間は本当に経つのが早いと感じる。

大学に入学して、高校時代から続けていた登山の他にカヌーを始めたが、すっかりその楽しさに魅せられてしまった（注：この文章は部活勧誘ではありません）。ほぼ毎週末は、悠々たる流れに身を任せながらのんびり川下り、北海道の大自然を「これでもか！」という程満喫した。カヌー部初の試みとなる本州遠征にも参加させていただき、１年目にして本当に貴重な体験を沢山させていただいた。

楽しい思い出ばかりではなく、慣れないうちは艇ごとひっくり返って川の水を大量に飲んでしまったり、波に巻き込まれて出ることができなくなったりと、恐ろしい経験もした。そんなこともあって、川に対する危機意識・安全意識は強いと思っているし、もっとうまくなりたいと思って一生懸命練習した。

ただ、掛け持ちしている登山については、幸いにというか今まで命の危険を感じるような体験をしたことはなく、返ってそのせいかやや惰性で続けていたところがあった。「まぁ多分大丈夫だべ。」という緩慢な気持ちで取り組んでいたところがあった。白状します。それを友人に指摘されるまで気づかなかったのだから、何とも恥ずかしい。

生と死が常に隣り合わせのアウトドア。次年度以降先輩となったときに、絶対にこのままではいけない。登山は４年間続けてきたものだったからショックだったけれど、自分なりにとても悩んだし、考えた。間もなく山と川のシーズンが始まろうとしているが、今年一年も、そしてこれからも無事故で楽しく活動できたらと思う。「１年間を振り返って」みたとき、真っ先にこのことが頭に浮かんだ。

すてきな仲間に囲まれながら学生生活を送ることができて、幸せです。皆さん１年間本当にお世話になりました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

１年を振り返って

医学科　第１学年　千　葉　　遥

旭川医科大学に入学して、あっという間に１年が過ぎ、去年の今頃、合格に浮かれて遊び呆けていたことが昨日のことのようです。

大学に入ってまだ１年しか経っていませんが、私は大学生活が人生の中で最もかけがえのない時間、そして思い出になると思っています。なぜなら、私にとってこの１年が本当に本当に素敵なものだったからです。

特に、素敵な友人や先輩達に出会えたことで大変な勉強も乗り切ることが出来、勉強はもちろんIFMSAなどの様々な活動を経験し、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。同じ目標を持った友人と共に学んだり、自分の学びたいことを学べるのは大学ならではです。部活も色々なものがあり、自分のやりたいことができます。７つの部活に入っている人までいるくらいです。私は、バドミントンとIFMSAという医学生の活動に入っているのですが、他の部活にも積極的に参加し、より多くのことを学びたいと思っています。

また、大学生活において忘れてはいけないのが学業です。私がこの１年間で最も恐れていたことでもあります。AO入試で入ったので、医学部の高度な勉強についていけず留年するのではないかと、とても不安で仕方ありませんでした。テストの週になると、毎日のように先生に質問に行き、今までで１番と思うほど勉強しましたが、それでも不安とテスト範囲の多さで毎回のように泣いていました。しかし、勉強内容は自分が興味あることなので面白く、沢山勉強することによる達成感と知識が増える喜びも大きかったです。また、テストの回数を重ねるごとに要領がよくなり自分の成長も実感できました。そして、私の初歩的な質問にも時間を割いて教えてくれた先生や友人には本当に感謝しています。

この１年間を経て、感じたことは悔いの残らないように生きるということです。自分の目の前に色んな可能性が広がっているのなら、そのチャンスをつかむ努力を惜しまず悔いの残らないように生きたいと思いました。

１年間を振り返って

医学科　第１学年　山　田　一　紀

後期試験も終わり、去年の合格発表から早１年が過ぎようとしています。初めて来る北海道に対して、期待と不安が入り混じった感情だったのを今でも思い出します。

知っている人が誰もいなく右も左もわからない状態だったため、新しい環境になかなか順応できず、入学当初、苦労することも多々ありました。特に新入生歓迎シーズンにインフルエンザに罹ってしまったときは一人暮らしでの健康管理の大切さを思い知りました。そのような中、部活の先輩や友達に恵まれ新しい環境に徐々に馴染んでいくことができました。

この１年を振り返ると、部活動が私の生活の中心にありました。部活動は学内では空手部や水泳部、放送研究会、「Med-Edu」など、様々な部活に所属しています。また、最北の単科医大ということもあり、学内だけでは自分と関わりのもてる人が限られてしまうため、学外の人々と交流するためにも「国際医学生連盟日本（IFMSA-JAPAN）」に所属しています。「国際医学生連盟日本（IFMSA-JAPAN）」では「性と生殖・AIDSに関する委員会（SCORA）」に主に所属しており、セクシャルマイノリティや性行為に対する知識や考えを自主的に勉強することが出来ました。

また他にも「CIK（地域医療について語る会）」や「CIS-innovation-」にも参加しており、自分の興味がある地域医療について学ぶ機会を得たり、実際に地域の病院に赴いて病院実習に参加しました。「CIS-innovation-」では全国規模での実習を行っているため、全国各地での友人が増え、自分とは異なる地域医療に対する考えを得る貴重な体験をすることが出来ました。

このように今年度は学内、学外に関わらず、この北海道という土地で多くのつながりを得て、初めての体験をすることができた１年でした。来年度は、この１年で得たつながりや体験を大切にすると同時に、これらを活かして自分の興味ある活動に関してより深く学んでいきたいと考えています。

「入学してからの１年間」

看護学科　第１学年　楯　　尚　子

旭川医科大学に入学してから、あっという間に１年間が経ってしまいました。この大学に入学したいという一心で、受験勉強をし、合格発表のときに自分の受験番号を見つけたときは本当に嬉しかったです。そして、楽しみにしていた大学生活は思った通り、毎日が楽しくて気付けば月日が過ぎていました。

まず、自分が志していた医学に携わる勉強をすることができている事も毎日の楽しみでもありました。１年生の時点ではあまり専門的なことは学びませんが、実技などは将来臨床の場で、今自分が学んでいることを実施するという授業の重要さが強く感じられ、厳しさと共に楽しさを感じていました。そして、日々勉学に励み、課題などが多くて大変だなと感じる時期もありました。さらに、テスト期間は同期や先輩方が図書館にこもり勉強している姿を見て刺激を受けたときもありました。

その中でも入学して初めて見て入部を決意したアイスホッケー部での活動がとても1年間充実していたなと感じます。活動が忙しくなるのは冬だけかなと思っていましたが、夏も合宿があったりして合宿に課題やレポートを持参して暇な時間にしていた記憶があります。年中忙しかったような気がしますが、部活動以外のレジャーも多く、早く先輩方との仲も近くすることができたなと感じています。先輩方が本当に良くしてくれるので忙しくても部活が辛いと思ったことはありません。さらに入部してからはマネージャーとして何をするべきなのかを学べるだけではなくて、部内での上下関係の大切さも同時に学べました。中学・高校共に部活をしてこなかった私にとっては、とてもいい経験をすることができていると思います。１年間は右も左もわからず一生懸命ホッケー部で頑張ってきましたが、来年からは後輩ができるので見本となれるような良き先輩になれたらいいなと思っています。

進級しても学業に手を抜かず、勉学に励みながらも部活動を頑張りたいと思います。

一年を振り返って

看護学科　第１学年　藤　井　千妃呂

この一年は長いようで短く、あっという間に過ぎて行きました。今でも、入学したことがつい最近のように感じます。入学当初は、慣れない土地での一人暮らしや学校に馴染めるかなど多くの不安を感じていましたが、優しい先輩や友達に恵まれすぐに慣れることができました。

大学での勉強は専門的なものが多く、日々の学びから知識や技術が身に付いてきていることが感じられます。まだまだその知識や技術は不足しているし、これから学ばなければいけないことはたくさんあるけれど、この一年で学び得たことは将来につながる大きなものだったと思います。また、これらの学びを得るためには、自ら積極的に学ぼうとする姿勢が大切だということも、この一年で強く感じました。

部活動では、大学で新しいことを始めたいと思い、バドミントン部に入りました。初心者でついていけるのか不安でしたが、先輩方が優しく教えてくれるため、楽しく活動ができています。どの部活もそうだと思いますが、大学での部活の先輩方や同期のつながりはとても強くすばらしいものだと思います。先輩方にご飯や遊びに連れて行ってもらったり、同期には誕生日を盛大に祝ってもらったりなど、楽しい思い出がたくさんあります。このつながりを大切にこれからの大学生活も送っていきたいと思います。

一年間を振り返ってみて、大学生活は今までの生活とは異なり、勉強とバイトの両立など大変な部分も多いけれど、それ以上に楽しいことが多い一年でした。そして、親元を離れた生活をすることで親のありがたみも知ることができました。バイトや一人暮らしなどを経験することで人としても成長できた一年であったのではないかと思います。なによりこの大学に入って良かったと思うことは、すばらしい仲間に出会えたことです。これからも同じ夢を持つもの同士高め合い、大学生活を送っていきたいと思います。

放射線（核医学）診療を志したきっかけと想い

放射線医学　教授　油　野　民　雄

1972年３月に金沢大学医学部卒業後直ちに母校の放射線医学教室に入局（当時は、インターン制度廃止、現在のような初期臨床研修制度もなかった。））してから、現在に至るまで一貫して放射線医学に、そのなかでも核医学を主体に診療に従事してきた。間もなく（2013年３月末）65歳の定年退職を迎えるが、1993年に現在の勤務先である旭川医科大学に赴任したので、ほぼ21年間を金沢大学、残り20年間を旭川医科大学で過ごしたことになる。この機会に、41年に及ぶ核医学診療を志したきっかけを振り返るとともに、その想いを改めて考えてみた。

１．医学部への入学

そもそも医師になりたいという強い動機があって医学部を受験したわけではなかった。高校は理科系進学コースに在籍していたが、自分がどのような分野に向いているのかわからず、３年生になっても受験大学・受験学部を決めかねていた。結局、父親が京都西陣織の下請けである撚糸業に従事していることから繊維関係ということで京都工芸繊維大学繊維学科と、地元の北陸の大学ということで金沢大学医学部、富山大学薬学部に願書を提出した。願書を提出した三大学のうち、金沢大学が一期校、他の二大学が二期校（当時、一期校、二期校という分け方で受験日が異なっていた。）であったので、最初に受験したのが金沢大学医学部である。偶々、最初の受験で合格してしまったので金沢大学医学部に入学し、医師の道を志すことにした。

２．放射線科の選択

中学時代まで田舎（石川県河北郡七塚町白尾（現、かほく市白尾））で過ごしたせいか、学会懇親会のように人がよく集まる場では未だに物怖じするなど、性格が内気で内向的である。最終学年の６年生になっても、その傾向が治らなかった。したがって、患者さんを直接相手とする診療科は自分には向かないと思っていた。画像診断なら何とか勤まるのではないかと考え、放射線科医の道を選択した。ただし、放射線科は患者さんを直接相手にしない科と受け取られると困るので、画像診断のように患者さんを直接相手としない領域から、放射線治療のように直接患者さんを相手とする領域まで、放射線科の領域は極めて多岐に亘ることを強調しておきたい。

３．核医学の面白さと想い

画像診断には形態画像診断と機能画像診断があり、病気の診断には両方が大事である。その際、病気が有るか無いかは、通常X線CTやMRIなどの形態診断で行われる。しかし、病態の変化では一般に機能変化が形態変化に先行するから機能画像診断が有利なこともあるし、今後の治療や予後のことを考えると機能診断も必要になってくる。適切な例えではないが、将来自分の伴侶を選ぶ場合を想定してみたい。顔貌を見て、美男、美女であれば心をときめかすかもしれない。しかし、それだけでは結婚しようとは思わない。自分と性格が合うかどうか、相手の内面的な性格を知ることが重要であり、性格美男、性格美女であることが確かめられれば、結婚したくなる。病気の診断にも同様なことがあてはまる。病気の内面的な性格（性状）評価が重要であり、それにはまさに機能画像診断である核医学でないと評価できない。41年間に亘って核医学診療を継続できた理由、すなわち核医学診療の面白さは、この点にあったと考えている。

最後に、卒業後41年に及ぶ診療生活を振り返って反省すべき点は多々あるが、吉田学長を始めとする大学の多大なご理解を賜り、良き恩師（久田欣一・金沢大学名誉教授）、尊敬すべき先輩（利波紀久・金沢大学名誉教授、鈴木豊・東海大学名誉教授など）、素晴らしい同僚（高橋康二・放射線部長、秀毛紀至・元準教授、西部茂美・診療技術部長など）などに恵まれ、充実したものであったと思う。お世話になった関係の皆様には深く感謝申し上げたい。

臨　床　検　査

臨床検査医学講座　教授　伊　藤　喜　久

月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり。自治医大から2000年に赴任し12年余り、あっという間の年月でした。臨床検査医としての約40年間取り組んだ尿中低分子タンパク研究の中から、複数の成分が保険収載されました。臨床応用がこのように長きにわたり医療の現場で実際に展開されてきたことはこの上もない喜びです。言葉に尽くしがたいものです。研究、教育、検査サービスに多大なご指導、ご協力いただきました教職員の皆様に心から御礼申し上げます。

精製度の高い蛋白質と特異性の高い抗体を自ら持つことにより研究の信頼性、持続性が生まれてきます。構造、物性、機能解明から測定の意義に至るまで、個別の成分の特長に応じた研究を体得してきました。前任地から継続させ、臨床検査としての一つの終結点を測定標準化に落とし込めたことは幸いでした。このことは広く、異なる視点から検査の問題点を探るうえにも大いに役立ったものです。一つの検査項目が息長く利用されるには、高い臨床的意義があること、測定結果が信頼できること、そして安価で簡単であることが必要となります。定量測定では科学的な根拠に基づく測定条件の設定と実行が求められ、これらの多くは優れた先達が築き上げた研究成果に濃縮されており、何よりも“確かな検査値を伝える”哲学、理念が貫かれています。歴史的に見ますと、ちょうどこちらへ赴任した時代は、日本のあちらこちらで検査値の質の低下傾向が見え始めている頃でした。外からはなかなか見えにくいものですが、経営効率、迅速報告などの検査効率など成果を求めすぎたのが原因でした。検査値の質の重要性が医師に十分理解されていない側面も否めません。製品として販売されている測定キットも、以前はほとんどの検査試薬会社が自前で蛋白、抗体を作製していましたが、外注することで、ほんの束の間の経費節減と引き換えに、自らの製品の質を失う事態が起きています。この問題を解決するには、不偏不党の立場から精密評価検討する以外になく、それは大学などの公的機関でなければできません。測定値のバラツキの機序の解明に、ひとつの解決策として小職は標準物質を作製し続けてまいりましたが、この間心あたたまるご支援を賜りました皆様に深く感謝申し上げます。これからも国内外を問わず、次代を担う方々とご一緒に測定値の質の向上に微力ながらつくしたいと願っています。

良質な医療の提供を通じて地域住民の健康を増進することが求められています。前任地自治医大の卒業生からの、経験に根差した真摯な意見も取り入れ、地域医療という実際の場において 医師が自ら検査を実施し、補助診断できるよう簡易検査を調え、その実習に重きを置きました。従って医学生の教育においては 2年生から6年生まで実習を中心に据え、できる限り共に時間をかけるよう心掛けました。ポリクリでは実際のデータを自ら出し、データ解析をします。驚くほどの面白いアイデアを述べる学生に、しばしば出会いました。この時が最も幸せを感じる時でした。検査に少しでも関心を持っていただけたら幸甚です。看護学科はこちらに赴任する直前に福島県立医科大学の吉田 浩教授に重要性を説かれ、赴任後選択科目として担当し検査の意義を伝えることに努めました。学士入学生の履修が多く、既に現場でPOCTなどの簡易検査の経験を積んでおられるせいもあり、主体的に講義に臨まれ、目が輝いていたことを覚えています。

検査部は、創設当時から高い検査の水準が維持され、諸先生の専門領域からの熱心なご指導もいただき、経営面も含め充実した検査サービス、教育参加、研究・研修が行われてきました。赴任後、感染対策に力を注いだ時の医療監視で、微生物検査室の業務に対しお褒めをいただきました。これからも地域の検査室として創造力を高め、一層個性豊かに深化していただきたい。大切なのはみずから研究開発したものを、応用展開を図る、このことが求められます。とりわけ精度保障/精度管理が命であります。検査値を広く目配りしてその質の向上を目指しより早期発見、予防、疾病予測、余命予知など未開拓な分野にも裾野を広げ、医学医療の現場の底上げを創出し続けていただければと願っています。臨床検査・輸血部の飛躍的な発展を確信しています。英文名称は、患者医療に直結する新しい創造の発信地の意味を込めてMedical Laboratory and Blood Centerとしました。

小職はこれからも臨床検査の研究、診療サービス、教育に微力を傾けていく所存です。旭川医大のさらなる発展と、教職員の皆様のご健勝をこころよりお祈り申し上げます。至誠に悖るなかりしか。ありがとうございました。

海外ボランティア診療に参加して

ベトナム診療隊を振り返って

看護学科３年　飛　騨　由紀乃

今回私がベトナム派遣を志望した動機は、以前から海外での医療活動に興味があったからです。今回派遣されたベンチェ省は、ベトナム戦争で枯葉剤の被害を受けた地域であり、そのために奇形を持った子供が未だに多く生まれます。今回の診療隊は、そのような地域に生まれた口唇口蓋裂の人たちへ無償手術・治療を行うプロジェクトでした。

資格を持たない一学生として、できることは限られていましたが、機材準備や備品管理など与えられた役割を精一杯果たすことで少しは今プロジェクトに貢献できたのかと思います。枯葉剤に含まれていたダイオキシンの被害は、当時その場にいた人だけではなく、その次の世代へどんどんつながり、被害を受けた子供たちが生まれ、ベトナムでは胎児の奇形がわかると中絶を選択する人も多いと知りました。戦争はその時代の人だけではなく、その先の世代の多くの命も奪う。その事実を日々感じながら、全国各地から集まる医療職者や学生の方々、現地のスタッフとの交流を通して､たくさんの刺激を受け、医療的な側面はもちろん、一人の人間として学ぶことが多くありました。病院の設備など日本とは大きく異なる環境の中で、手術後の患児たちが良くなっていく様子や本人・家族の笑顔を見て、医療が存在することの意味も改めて考える機会となりました。

このような、貴重な経験をする機会を与えてくださった全ての方々に感謝します。本当にありがとうございました。

第65回 ベトナム社会主義共和国ベンチェ省における医療活動に参加して

旭川医科大学医学部看護学科４年　鳥　越　千　翔

私は，小さな頃から国際保健に興味があり，将来的に保健師・看護師として国際保健に携わっていきたいと考えている。そのため，ベトナムのような発展途上国における医療援助活動についても学びたいと考え，今回のベトナム診療隊に参加させていただいた。今回の活動は，移動も含めて９日間の日程だったのだが，その短い期間の中でも，とても内容の濃い，充実した活動を行わせていただいた。

活動を行ったグエンデンチュー病院の手術室は，日本とベトナムで協力して建設しており，また手術機材は多くを日本から持参していることもあり，設備はとても充実しているように思えた。しかし，その中でも機材の数に限りがあったり，日本でディスポーザブルとして使っているものも再滅菌して使うなど限られた設備の中で手術を行わなければいけないことを知り，発展途上国における医療援助の厳しさを感じた。

手術日の前に，一日かけて手術する患者さんの選定や経過観察のための診察日があったのだが，診察の場所へ行くと既に100名近い患者さんやその家族の方が待っておられた。その姿を見てベンチェ省の患者さんやその家族にとってこのプロジェクトがとても重要なものであり，長い間心待ちにしていたのだろうと感じた。

実際の手術では，手術の見学はもちろん，実際に器械出しなどの直接介助も行わせていただいた。大学での実習でもこのような体験はできなかったので，とても緊張したが本当に貴重な体験をさせていただいた。また，中央器材室で手術器具を滅菌するためにパッキングしたり，セットしたりと，医療の裏方の部分も体験させていただき，その重要性や様々な職種や役割があり，それぞれの活躍があるからこそ，初めて医療が成り立っているということを改めて学ぶことができた。

活動の最後には，手術後の患者さんとお話をしたり，一緒に写真を撮ったりととても身近に患者さんと触れ合うことができ，このプロジェクトの意義を改めて感じることができた。

今回の活動は本当に自分にとって有意義なものとすることができた。このような活動に参加することができたのは，学生の参加を受け入れてくださった諸先生方はもちろん，旭川医大の海外活動助成制度に援助くださっている皆様など，たくさんの方々のご協力があったからこそと考える。ご協力くださった皆様に心から感謝したいと思う。今回の活動で，学んだ多くのことを生かし，将来，海外で活躍し，国際保健に貢献できる保健師・看護師になりた。

留学助成制度を利用して

医学科第５学年　立　岡　美　穂

私の夢は病院を子どもたちにとってPositiveな場所にすることです。
同じ境遇におかれた仲間に会える場所、痛みから解放される場所、病気の経験から次のステップへ踏み出すことができる場所。
～多くの人が口を揃えて「悲しい場所」「気分が沈む場所」という病院をそんな場所にしたい。～
そういう思いをもって医学部へ進学してきました。
そして早５年。

勉強して実習して、思っていたよりもずっと複雑で教科書だけでは学びきれない医学の現実。そんな中、『自分の夢はただの夢物語なのではないか。』と思うことが多々ある中、ヒントを求めて今回の留学を計画しました。

NYでのHospital Crownとの研修旅行（NY）とカリフォルニアでのCLS（Child Life Specialist）についての勉強。廻った病院や施設は合計で13か所、期間にして１カ月と１週間の長旅です。

そんな中で私が得たものは　【Respectの気持ち】と　【夢へ再び向かう勇気】　でした。

子どもの心に近づくスキルを持っているCrown。
医師以上に子どもやその子を包む環境について把握し統合的思考をしているCLS。
初めて触れるスキルに学問。そして自分たちの仕事に誇りを持った優しい笑顔。
ただただ私が感じたのは尊敬の気持ちです。

そしてそんな人々が医師や看護師に多大な敬意を払っているという事実。
身の引き締まる思いでした。

自らの仕事に誇りを持ち、そして同時に責任を負い、誠心誠意向き合うことの大切さ。
そして一人では実現し得ない仕事だからこそ、傲慢にならず、共に働く者の仕事に敬意を払うことの大切さ。それを支えるコミュニケーションの大切さ。

「コワーキング」や「チーム医療」。大切だと分かりながらもどこか上滑りしていた言葉たちが、深く入り込んできて、ハッとさせられた瞬間でした。

また、全くスキルのない私を受け入れてくれたCrown達、想いに共感し一度しか会ったことのない私を快く受け入れてくださったMills大学の先生方、私と同じような経緯でCLSを目指す学生や、夢に向かって７年間も海外で励む日本人CLSの方など多くの方から、このように夢をもう一度口に出す勇気をいただきました。

「何かを成し遂げたければ、ひとつ一所懸命に知識をつけ、スキルを学ぶこと。そうすれば余裕が生まれ、その余裕で新しいことができる。これを繰り返すこと。」
今回一緒に行動させていただいたCrown大棟さんの言葉です。

私の夢は大きく抽象的なもので、いつ、どう実現するのか分かりません。それでも同じような志を持つ人が海を越えた場所にもいること、そしてその各々（人々or彼ら）が敬意に足る知識を持ち、スキルを持っていることを今回の旅で学びました。
そんな彼らのように人への敬意を忘れず、また自らもその敬意に見合うだけの知識やスキルを身につけること。それを繰り返しながら、できた余裕で多くの人々を巻き込んで夢を語り合うこと。そうやって夢の実現に近づいていくこと。これが私の夢の実現への次なる目標です。

最後に、このような素晴らしき機会をくださった、プレジャー企画の皆さま、Mills大学の皆さま、病院の皆さま、そして旭川医科大学の皆さま、そして留学助成制度にご寄附いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

—The Possibility is only limited by your imagination.　St Mary’s Hospital

外国人留学生交流事業

平成24年度の外国人留学生交流事業が３月１日（金）・２日（土）の２日間の日程で，本学に留学している学生とその家族及び関係職員の７カ国，計16名が参加して実施されました。

この事業は旭川市内近郊だけではなく，北海道内の名所を外国人留学生及び帯同されている家族の方々に観てもらい，北海道の良さを再認識してもらうこととともに，様々な国から来日されている留学生同士の交流及び外国人留学生と職員との交流を図ることを目的としたものです。

当日は，午後から旭川を出発し，札幌の白い恋人パークを見学しました。その後，宿泊施設であるガトーキングダムサッポロに到着し，夕食の後にカラオケを交えた交流会が実施されました。普段は話をする機会の少ない留学生と教職員とも，とても和やかな雰囲気の中で情報・意見交換が行われました。

翌日は，午前中に大倉山展望台のウィンタースポーツミュージアムへ行き，資料の展示ゾーン，各競技の疑似体験ができる「体感・体験ゾーン」などのさまざまなコーナーを見て，触れて，体験しました。待ち時間にはとても楽しそうな雪合戦が始まりました。ウィンタースポーツの楽しさ，素晴らしさを実感することができたのではないでしょうか。その後，昼食をとり，北海道のシンボルである赤れんが庁舎を見学し，夕方に本学に到着し，外国人留学生交流事業が無事終了しました。

学　生　表　彰　式

平成25年１月22日(火)に事務局第一会議室におきまして，本学学生表彰規程の第２条の（２）「課外活動で特に顕著な成果をあげた者又は団体」及び（４）「学術研究活動で特に顕著な功績があった者又は団体」という規定に則り，優秀な成績を修めた学生に対して学生表彰式が執り行われました。

当日は,吉田学長より表彰状と記念品が授与され,輝かしい功績に対して祝辞が述べられました。

表彰者は以下の通りです。

第46回全日本医科学生体育大会王座決定戦
　ソフトテニス競技　女子団体戦
　　優　勝　ソフトテニス部
第55回東日本医科学生総合体育大会
　弓道競技　　個人戦　優　勝　幸　前　　和
第55回東日本医科学生総合体育大会
　バドミントン競技　男子団体戦
　　優　勝　バドミントン部
第55回東日本医科学生総合体育大会
　剣道競技　　男子団体戦
　　優　勝　剣　道　部
第55回東日本医科学生総合体育大会
　柔道競技　男子団体戦　３位
　　女子団体戦　優勝　柔　道　部
第59回北海道地区大学体育大会
　サッカー競技　　優　勝　サッカー部

▲ソフトテニス部

▲バドミントン部

第59回北海道地区大学体育大会
　ハンドボール競技　　優　勝　男子ハンドボール部
第101回日本病理学会
　学部学生示説発表　最優秀賞　松　尾　康　博
第109回日本内科学会総会
　公開討論　　優秀賞　早　坂　太　希

▲弓道部（財前　和）

▲剣道部

▲柔道部

▲松雄康博

白衣式について

平成25年2月15日（金）旭川医科大学看護学科棟大講義室にて、第１回医学科白衣式が挙行されました。４年生つまり医学科2009カリキュラムの１期生の皆さんに送るエールの意味も込めて第１回医学科白衣式です。

白衣式は、「医師のプロフェッショナリズム」を意識させるものとして1988年米国コロンビア大学で始められました。近年の医学の進歩は目覚しいものがあり、それにつれて医学生が習得しなくてはならない知識も膨大になっています。その一方で軽視されがちになってしまうのが「医師を目指した時の初志」です。学生の皆さんが「医師を目指した時の初志」は、漠然としたものだったと思います。しかしながら、この気持ちの中には、ヒューマニズム、倫理観、利他主義などの医師としての基本項目が含まれているはずで、言葉として整理すると「医師のプロフェッショナリズム」ということになります。

白衣式では、同期の友人たちの前で、教員の先生方から白衣を直接着せてもらいました。この場面は、厳粛でありながら、教員と教え子の間のユーモアが通いあう感動的なものです。また、学生たちには、どのような医師になりたいかを学年でまとめ宣言してもらいました。この宣誓文を学年で作成し皆で唱和して宣誓することで、患者さんに対して持つべき慈愛の心を深く意識し、職業人としての責任を心に刻むことができるのではないかと思います。

医学科2009カリキュラムは、吉田学長を迎えた「新生」旭川医科大学が、地域医療を意識して構築したカリキュラムです。このカリキュラムの１期生が現４年生であり、この２月から臨床実習に臨むことになります。この門出を祝う意味も込めて第１回医学科白衣式を行いました。医師のプロフェッショナリズムとは、生涯教育を行っていくモチベーション、ヒューマニズム、倫理観、利他主義、チーム医療などすべてが含まれる概念であり、医師になる上で欠かせません。臨床実習に出る直前に、「医師のプロフェッショナリズム」とともに「医師を目指した時の初志」を再確認してもらえることを期待しています。

平成24年度　学位記授与式

平成24年度学位記授与式が，３月25日（月）10時30分から本学の体育館において挙行されました。

本学の室内合奏団の演奏がBGMで奏でられる中入場し，医学科94名，看護学科69名の計163名の卒業生の一人ひとりに学長から学位記が授与され，全員と握手をしてこれからの社会人としてのスタートに激励の言葉をかけられました。

引き続き，博士課程12名，論文博士２名，修士課程６名にも同様に学位記が授与されました。

式の終了後，別室にて成績優秀者の学生表彰も執り行われました。

その後，会場を学生食堂に移し，祝賀会が開催され，医学科・看護学科卒業生のそれぞれの学年担当教員や各同窓会長からの祝辞，在校生代表からの掃除が贈られ，卒業生の代表も謝辞として，大学生活を振り返り，また，新社会人としての抱負を披露していました。

▲吉田学長　告示

▲玄関前にて

▲祝賀会

▲医学科全体

▲看護学科全体

学生から取得した個人情報の取扱い方針

〔平成25年３月19日
学　長　裁　定〕

１．基本理念と方針

旭川医科大学は（以下「本学」という。）は，情報社会における個人情報保護の重要性を認識し，個人情報を適切に管理することを社会的責務と考え，関係法令及び本学の諸規程並びに以下の方針に基づき，学生等から取得した個人情報の適切な保護管理及び取扱いに努めます。

２．個人情報の種類と利用目的

本学が取得する個人情報の種類と利用目的は，次のとおりです。

	個人情報の種類	利用目的
1	学生本人の氏名，メールアドレス，学生証番号，住所，電話番号，生年月日，出身校，顔写真，留学生区分，在留区分，在留期間，国籍等	学生本人との連絡（掲示を含む。以下同じ。），学生の呼び出し，学籍管理及び履修成績管理，卒業判定及び進級判定等の連絡，学生名簿の作成，授業運営，賞罰の公示等，学内施設の利用管理及び入退室管理，図書館サービスの提供，図書館からの各種連絡（未返却図書の連絡等），図書館利用統計の作成
2	連帯保証人等の氏名，住所，電話番号	連帯保証人等との連絡，刊行物の発送
3	入学者選抜試験情報（入試成績，高等学校調査書情報等）	入学者選抜業務，修学指導，就職指導，入学者選抜方法改善等のための調査・研究
4	学籍簿情報（学生証番号，履修登録科目，単位修得期，成績評点，取得単位数等），その他成績評価情報	修学管理及び修学指導，各種証明書の発行，授業運営
5	授業料情報（預金口座振替，代行納付情報，授業料債権情報等）	授業料債権管理
6	授業料及び入学料免除情報（免除金額，家計評価額，所得金額，世帯の就学者状況，特別控除額等），家族構成，申請事由等	授業料免除及び徴収猶予判定，入学料免除及び徴収猶予判定
7	奨学金情報（家計支持者の所得，家族氏名，奨学生番号，貸与月額等）	奨学金の貸与等の判定，奨学金の推薦等
8	学生健康管理情報（身長，体重，視力，Ｘ線撮影情報等）	学生の健康管理
9	課外活動情報（学生団体設立（変更，継続）願等）	課外活動支援，修学指導
10	就職情報（進路希望情報，卒業後進路情報等）	就職指導等

３．業務の外部委託

上記２に掲げる利用目的に係る個人情報の取扱いの全部又は一部を外部に委託する場合があります。業務委託に当たり，安全確保の措置を講じます。

４．個人情報の第三者提供

本学の学友会及び同窓会から要請のあった場合には，学生の個人情報を安全確保の措置を講じた上，当該組織の活動に必要な範囲で提供することがあります。

５．第三者提供の事前同意

上記２，３及び４に掲げる利用目的以外に個人情報の利用の必要が生じた場合には，事前に本人の同意を得ることとします。ただし，法令に基づき提供を義務付けられている場合，行政機関等の公的機関が法令の定める事務又は事業を遂行することに協力する場合又は専ら統計の作成及び学術研究を目的にする場合においては，本人の同意を得ることなしに，第三者に個人情報を提供することがあります。

６．苦情等の受付

学生，連帯保証人等に係る個人情報の取扱いについての苦情及び相談は，学生支援課で，学生本人に関する個人情報の開示，訂正又は利用停止の請求については，総務課で受け付けます。

附　則

この取扱い方針は，平成25年３月19日から実施する。

各種保険について

○本学医学科学生が加入する保険の概要は、下記の図のとおりで①から③の３階建てとなっております。

③　学生・生徒総合保険Ａ･Ｂタイプ　※３階部分	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償＆針刺し事故を補償
補償金額	死亡補償金　Ａタイプ・Ｂタイプ　300万円 対人賠償　Ａタイプ・Ｂタイプ　１億円限度 対物賠償　Ａタイプ・Ｂタイプ　１億円限度 感染予防費用　保険期間中50万円
掛金	別表のとおり。
加入	医学科第１～４学年の４年間は任意加入ですが、臨床実習が４学年後期からあるために２年２月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に６年間加入をしてもかまいません。 ※学生教育研究災害傷害保険（学研災）及び医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）に加入していること。

②　医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）　※２階部分	
内容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補償金額	対人賠償と対物賠償合わせて１事故につき１億円限度
掛金	６年間 3,000円　５年間(編入学生) 2,500円(1年間500円)
加入	入学時加入を義務付けている ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること

①　学生教育研究災害傷害保険（学研災）　※１階部分	
内容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合。 臨床実習中に接触感染症予防措置を受けた場合。
補償金額	死亡補償金　正課中　2,000万円 課外活動中　1,000万円 傷害補償金　正課中　治療日数１日から 通学中・学校施設等相互間の移動中　治療日数４日以上から 課外活動中　治療日数14日以上から 入院　１日　4,000円 接触感染予防保険金　臨床実習中　１事故につき　15,000円
掛金	６年間 4,800円　５年間(編入学生) 4,130円
加入	入学時加入を義務付けている

詳細については、学生支援課学生係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

①学生教育研究災害障害保険（学研災）は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。

②医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。

③学研災付帯学生生活総合保険Ａ・Ｂタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。

医学科第１～４学年の４年間は任意加入ですが、臨床実習が４学年後期からあるために２年２月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に６年間加入をしてもかまいません。

○平成24年に入学する本学看護学科学生が加入する保険の概要は、下図のとおりとなります。

(1)　看護学科学生Will２保険（看護学科学生対象）

本保険は、正課中、学校行事中、課外活動中及び通学中における事故により、学生本人が身体に傷害を被ったとき、また、他人を負傷させたり、他人の物を壊したことによる法律上の損害賠償を補償し、実習中における感染予防措置費用等を補償する保険です。この保険は、加入を義務付けております。

①　看護学科学生Will２保険	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償及び実習感染予防費用
補償金額	死亡補償金 236万円　対人賠償１事故　１億円限度 入院保険金 5,000円　対人賠償１事故　１億円限度 通院保険金 3,000円　感染予防費用 50万円限度
掛金	4,500円（１年間）
加入	本保険は、大学として加入を義務づけております。なお、契約期間が１年間のため本学では、入学時に４年間分また、編入学生は２年間分の保険料を入学時に徴収し、大学として契約手続きを行います。また、契約更新時も大学で手続きを行います。

平成25年度日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

平成25年度の募集説明は４月12日(金)午後５時15分から看護学科大講義室において実施します。希望者は必ず出席してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、学生支援課学生総務係に相談してください。

平成25年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について

本学では、看護学科に在籍する学生に対して経済的支援を行うことにより、学習に専念できる環境の整備を図るため奨学資金を貸与しています。

奨学資金の概要はつぎのとおりです。

○貸与対象者　看護学科学生

○貸与月額　35,000円

○返還　貸与を受けた期間と同等の期間内に、一括または分割で返還

○返還免除要件　被貸与者が卒業後直ちに、本学病院に常勤の看護職員として勤務した場合は、勤務月数に相当する月数分の返還を免除

貸与を希望される方は、看護学科事務室へお越しください。申請書等をお渡しします。

申請書配布　平成25年４月１日(月)～平成25年４月19日(金)

申請期限　平成25年４月26日(金)まで

なお、在籍者（休学者又は留年者は除く）についても、貸与の申請を毎年行うこととなっております。ご注意ください。

授業料未納による除籍について

授業料を２期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成25年４月１日において授業料を２期以上滞納している場合、平成25年９月30日をもって除籍となります。

以後授業料納期である６か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご留意ください。

学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成25年４月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、平成25年４月26日（金）までに「学生団体継続届」を学生支援課学生総務係に提出して下さい。なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は平成25年４月26日（金）までに学生支援課学生総務係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

インフォメーション

５月８日（水）　学生定期健康診断　医学科第２学年
※医学科第５学年・第６学年、看護学科第４学年および大学院生また外国人留学生は、上記日程の都合の良い日に受診すること。
※受付けの際に、必ず学生証を提示してください。
（学生玄関ホール　受付時間　12時30分～14時30分）

６月７日（金）　大学祭「医大祭2013」（前夜祭）
８日（土）　大学祭「医大祭2013」（一般公開　第１日目）
９日（日）　大学祭「医大祭2013」（一般公開　第２日目）